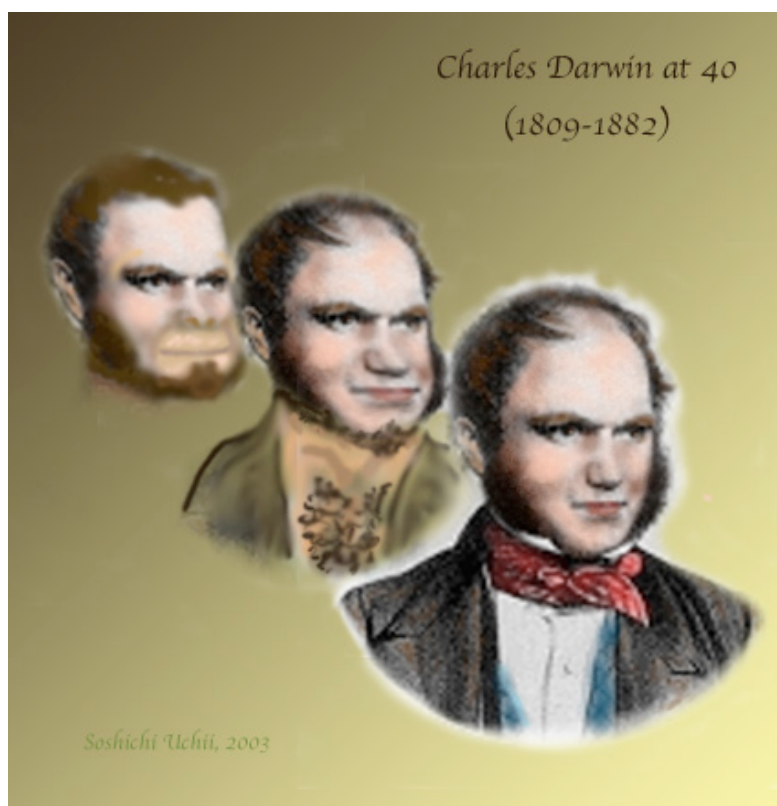


PhilSci Newsletters No. 13

Editor Ucci Uccini

岩波『科学』の巻頭エッセイを頼まれた。2010年2月号に出版されたので、このニュースレターにも転載しておく。



Darwin's Evolution?

No. 13, February 3, 2010

Darwin's Play: From Play to Research

by Ucci Uccini

遊びから研究へ 内井惣七（うちい そうしち、京都大学名誉教授、科学哲学）

ダーウィン生誕 200 年、節目の年が終わった。わたしは、この機会を逃す手はないと、自分自身の「ダーウィン研究」をまとめるために、ここしばらく彼の著作や最近の新しい研究書などを調べてきた。その結果、いわば副産物として、強く印象に残ったことがある。それは、若いときからの彼の「遊び」がビーグル号航海中の多くの探検で実に見事に役立っているということ。

彼の「蒐集癖」はすでに子供の頃から始まっているが、大学時代の昆虫集めなどは、勉強や研究ではなく、まさに遊びの一つだろう。休暇中の狩猟も、ジェントルマンのたしなみ、ワクワクするような遊びだ。それに精出したおかげで、乗馬はうまくなる、射撃の腕も上げる、そしてエディンバラ大学時代には剥製作りの技術もおぼえる、といった具合だ。しかも、狩りの獲物については毎シーズン、綿密な記録を残す習慣まで身につけている。

ビーグル号に乗船し、海の上では船酔いに悩まされるが、ひとたび陸に上がると、精力的に探検に出かける。乗馬の腕は、南米のガウチョにも負けないほどのレベルだから、馬での長旅はお手のもの。例えば、政情不安定なアルゼンチンでは、パタゴニアの北部からバイアブランカ経由でブエノスアイレスまでのパンパスを馬で駆け抜けている。インディアン討伐を指揮していたロサス將軍にももらった旅券（「エル・ナツラリスタ・ドン・カルロス」と書いてある）を携えて、駐屯地を渡りながらの行程である。ブエノスアイレス到着の一週間後には、また北西部のサンタフェまでの旅に出る、と疲れを知らない。「遊び」でなくては、こうはいかないだろう。

山登りでは、彼の地質学上の大きな業績となったアンデス踏査が最も有名である。そのほかにも太平洋、大西洋上の島々、オーストラリアのブルーマウンテンズ、南アフリカのケープタウン周辺など、機会あるごとにガイドを雇って山に登っている。いろいろな「調査」が名目（父親から費用を引き出すため）だが、「この山、面白そうだから登ってみなければ」という、好奇心に突き動かされて、嬉々として「調査」に出かけたのだろう。壮年時代以後も、ハトに凝り、ランに凝り、

食虫植物に凝り、挙げ句の果てはミミズに凝る。実にうらやましい遊びようだ。

それで、結局わたしは何が言いたいのか？研究にいそしむ姿勢として、ダーウインのように「遊び」の延長線上でやることが、わたしにとって理想だ、ということにほかならない。[岩波『科学』 Vol. 80, No.2, 119 巻頭エッセイ]